

共同教化についての考察（中） 共同教化に対する意識

市野智行

一 はじめに

本論は、昨年の「共同教化についての考察（上） 共同教化の源泉」^①（以下「市野・二〇二〇」）からの課題を引き継ぎ、真宗大谷派（以下本派）における共同教化の現在と今後の展望について考えていきたい。特に筆者は本派名古屋教区の教化委員会（現在は寺院活性化支援部門）の協力を得て、二〇一九年九月に名古屋教区三十二カ組の六七八カ寺（教会を含む）に「共同教化に関する意識調査アンケート」（以下アンケート）を行った。共同教化とは、昨今の仏教・寺院の現況に対する、宗門のある種の打開策の一つである。では、その打開策について、日々教化の現場を担う住職（育成員）や坊守、僧侶は、一体どのような認識をもっているのか。本論は、アンケートを通して見えてきた課題点を点検整理することを目的とする。そして、その結果を次稿にて、同朋会運動の歴史から検証し、今日の共同教化、就中、寺院活性化への具体的提言を行いたい。

本論の前提として、「市野・二〇二〇」より明らかとなったことを五点確認しておきたい。

[1] 共同教化とは、諸仏如来にとも（私と他者）に教化せられていく、その場の共有と創造と定義できる。

[2] 本派における共同教化の「共同」とは「寺と寺」・「門徒と寺族」^③が想定されている。

[3] 明治期の「共同布教」の語には下意上達を基盤とした組織改革の願いが、また昭和期の「共同教化」の語には、同朋会運動を背景とした地方教化の振興を看取することができる。そして両者はともに、「組」を共同教化の基盤としている点は共通する。

[4] 住職・寺族の共同教化に対する意識を調査把握する必要がある。

[5] 同朋会運動における共同教化の実態を批判的に検証しつつ、今日の教化学あるいは共同教化について考察する必要がある。

以上五つの確認点のうち、本論では「4」現在における共同教化の意識調査について論じ、「5」は次稿にて考察したい。

二 共同教化の現在 アンケートの実施と結果

最初に調査概要を記しておきたい。

【調査概要】

● 調査対象…名古屋教区三十二カ組六七八カ寺

● 調査期間…二〇一九年 八月二日～九月三十日

● 調査方法…各組長に対して、組内寺院数のアンケート用紙と依頼状を送付し、組長から各寺院へ依頼(記名式)

● 回答方法…教務所へ返送(組長が集約して返送・個人返送)

● 回答数 …四二四

● 回答率 …六二・五%

本アンケート項目は二つに大別することができる。一つは共同教化に対する意識調査(以下意識調査)、もう一つは共同教化への取り組みに関する調査(以下実態調査)である。また末尾にはフリーコメント欄も設けた。今回、アンケートの集計と結果については、主として意識調査を取り上げ、実態調査は必要に応じて適宜紹介する^④。

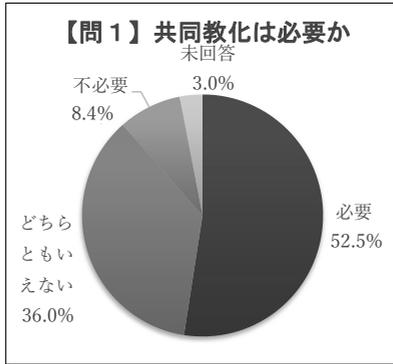
二―一 五つの設問とその回答

さて、意識調査の具体的な内容について、「Ⅰ…回答の選択肢」「Ⅱ…設問設定の理由」「Ⅲ…回答結果から特に注視すべき点」の三つの項目から整理したい。また、それぞれの結果については、一つを選択する設問については円グラフを、複数選択可能な設問については、棒グラフを付した^⑤。詳細は後述するが、今回の調査結果は組別と年代別に集計し、本論末尾に資料A Bとして添付した。集計方法の理由も含め、添付資料を適宜用いながら、論を進

めていきたい。

意識調査の設問は全五問からなる。

【問1】…共同教化は必要か（以下【問1】）



I …「必要」「どちらでもない」「不必要」（回答理由についての記述欄あり）

II …共同教化の必要性をどう考えているのか。またその要否にはどういった理由があるのか。

III …「必要」の主たる理由は、共有・運営・交流の三点にある。

・共有 とは、情報・危機感・課題・教学（学び場）の共有を意味し、共同教化に「共有」の機能を求めている。

・運営 とは、場の継続・役割分担・新規行事の立ち上げ・学場の拡充などがあげられる。具体的には、場に関わる人の育成・養成、また新たな参画が期待される。

・交流 とは、寺族門徒間の交流・地域コミュニティの場・学び合いといった寺院開放が念頭に置かれている。

Ⅲ…「不必要」への回答は約九％に留まり、多くの回答者が不必要なものとしては認識していない。不必要への理由の主たるものは、以下の通り。

・一寺院での教化の徹底。共同教化以前に一寺院としてやれるべきことがやれているのか、という意見。
・教化されるべきは寺院、寺族であるという意見。

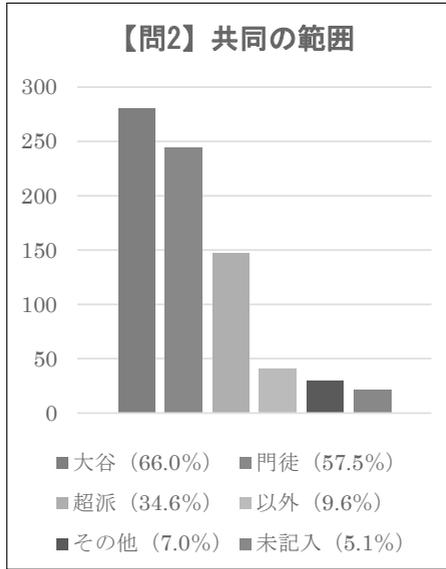
Ⅲ…「どちらでもない」への回答理由には、判断できないというものが大多数を占めた。

・必要（理想）であるが実現可能性が低い（現実）という意見が多かった。組への期待感の低下や、寺院間関係がうまく機能していない、との理由が多く見受けられた。

・共同教化には長短両面が存在する。長所は共有・運営・交流の三点にあるが、短所として過重負担や、負担の偏りがあげられる。

・そもそも共同教化という言葉自体を知らない、あるいは分からないため判断できないという意見も一定数見られた。

【問2】…共同の範囲として想定しているもの(以下【問2】)



I …「真宗大谷派の寺院」「寺院と門徒」「超宗派」「仏教以外の宗教」「その他」(複数回答可)

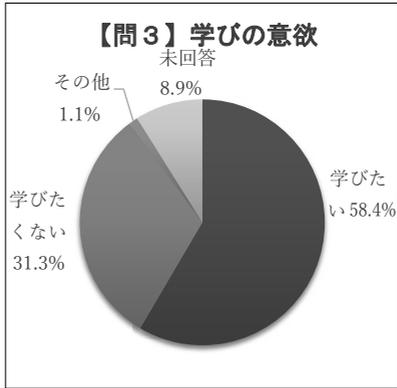
II …共同の範囲をどのように想定しているのか。

III …半数以上が「真宗大谷派の寺院」「寺院と門徒」を共同の範囲として考えている。

Ⅲ…「超宗派」も三分の一以上が共同の範囲内として想定している。既存の超宗派の団体（県や市の仏教会や地域の仏教会など）に属している寺院も多い。

Ⅲ…「仏教以外の宗教」「その他」は一割を切っている。

【問3】…共同教化の具体的な方法について学びたいか（以下【問3】）



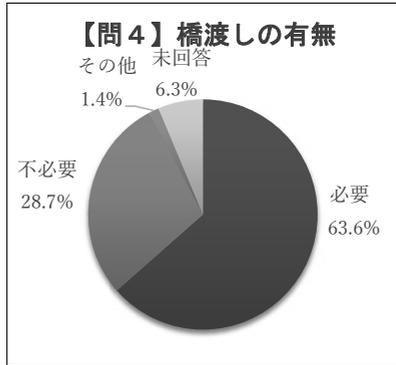
Ⅰ…「学びたい」「学びたくない」「その他」

Ⅱ…共同教化に対する学習意欲の把握。

Ⅲ…「学びたい」への回答数が、【問1】での「必要」への回答数よりも多い。

共同教化についての考察（中） 共同教化に対する意識

【問4】…寺院間の橋渡しの役割を担う機関は必要か（以下【問4】）



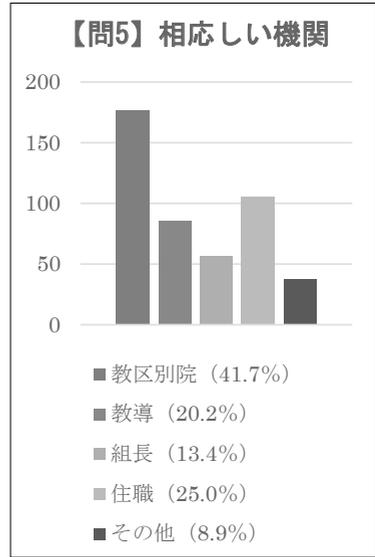
I …【必要】「不必要」「その他」

II …寺院と寺院をつなぐ媒介者、あるいは組織の必要性をどう考えているか。

III …【必要】との回答が六割を超えた。そもそも【問1】で「不必要」と回答した人は、ここでも「不必要」と

回答しており、共同教化を必要であると回答した多くが、何かしらの媒介を求めていると言える。

【問5】…【問4】に相応しい機関はどこか（【問4】で必要と回答した人のみ・以下【問5】）



I …「教区や別院の教化組織」「教区駐在教導」「各組組長」「住職や教会主管者」「その他」(複数回答可)

II …媒介者として想定されるものは何か。

III …「教区や別院の教化組織」への回答が最も高く、宗門の公的機関への信頼の高さがうかがえる。

III …「組長」への回答が最も少なかった。これは組によっては組長が輪番制であることや、そもそも組長の役割ではないとの理解もあると考えられる。「その他」の中に、組内の教化委員や教導との回答が一定数あった。

III …「住職」への回答が二五%と高かった。共同への架け橋が住職であるということは、すなわち回答者自身を指す場合が多く、共同教化の担い手としての意識のあらわれとも言える。

以上、アンケート結果の概略について主だった特徴のみを記した。全体の印象として共同教化については好意的に見られているようである。しかし、【問一】の「どちらでもない」への回答が三分の一を超えるなど、実現可能な施策であるかどうか、この点は懐疑的な見方が強い。

筆者はあくまでも共同教化の基盤は組にあると考えており、共同教化の実現、あるいは推進をはかる上でも、組が重要な役割を担う⁶⁾。ただし、既存の組の在り方のままで良いのか、という点については大いに議論が必要であろう。この点は後に考察したい。また、組を同じくしても、年代によって抱える課題や、置かれる状況は異なってくる。そのような問題意識から、今回は本アンケートを組別と年代別に集計した。

三 組別集計

実態調査の中で、【共同教化に最も適した寺院数は】という質問項目がある。もちろん活動内容や学習会の規模で、その適正数は変動するが、興味深いことに、約半数が十カ寺以下と答えている。意思決定の迅速さや大所帯での連絡・共有・交流上の煩雑さへの敬遠が、その背景にあると考えられる。

名古屋教区には様々な組がある。三十二カ組の中、最も所属寺院数が多いのは、第二十一組の四十九カ寺である。次いで、第四組の四十一カ寺、第二十組の三十七カ寺、第一、二、十四、三十組は三十カ寺で構成されている。かりに共同教化における寺院の理想数を十カ寺とするならば、ゆうに三倍を超える寺院数である。また、十カ寺以

下の組は、第十六、二十七組の十カ寺、第二十四、二十九組の九カ寺、第十七組の六カ寺と、わずか五つの組だけである。

そもそも共同教化における適切な寺院数を定めることは困難だが、名古屋教区は六カ寺から四十九カ寺まで大小さまざまな組が存立しており、見方を変えれば、様々なモデルケールを有しているとも言える。⁽¹⁾ その点を考慮し、今回のアンケート内容は、共同教化を考える上での「モデル組」の選定も念頭に置いた。たとえば、大規模な組で言えば、第二十一組がモデル組の候補となるだろう。反対に小規模ならば、第十七組が候補に挙がる。広域な範囲からなる組で言えば第二組や第二十三組が候補となる。別院周辺の都市型の組で言えば、第一組や第十八組である。その他にも様々なケースが想定されるが、本アンケートはそういった材料も提供することができる。

そして、この組別集計の結果から、共同教化の一つのモデル組として、注目したいのが、第五組である。

第五組は十二カ寺からなっており、十カ寺に近い構成となっている。また、本アンケートへの回答者が三十二歳から七十一歳と、幅広い世代から構成されている。

さらに、意識調査で、回答者全員（十一人）が、【問1】で「必要」と答え、【問3】では十人が「学びたい」と回答している。加えて、実態調査の【現在の組の在り方は共同教化の実践に相応しい組織と思うか】という設問に対し、十人が「思う」と回答し、一人は未記入であった。つまり「思わない」への回答は一つもなかったのである。以上の集計結果からだけでも、第五組の所属寺院が組を共同教化の基盤と認識し、且つ好意的に捉えていると言える。このように、組の構成面からも、また所属寺院の意識の高さからも、この第五組が名古屋教区における共

同教化のモデル組に相応しいと言える。

では、所属寺院は具体的に、組あるいは共同教化に対してどういった評価も持っているのだろうか。組が抱える課題を吟味した上で、モデル組として第五組の所属寺院の意識について、後に検討したい。

四 年代別集計

年代別集計の目的は、共同教化に対する意識が世代間でどのような違いがあるのか、という点を明らかにすることにある。本アンケートは二十四歳から九十五歳までの回答者からなっている⁽⁸⁾。そこで、二十歳から九十歳代までを五歳ごと全十五区分とし集計した。その内訳は末尾資料Bの通りである。回答人数は五十代六十代を頂点とし、そこから若年層、老年層へ減少していく。二十代は全体の〇・二%、八十代以上も一・六%と少ない。

さて、年代別集計から筆者は「学びの導線」について考えてみたい。たとえば組が主催する学習会に参加する場合、世代の異なった人がその場を共有することとなる。ちなみに、今回最も回答数が多かった第二十一組では、三十代が二人、四十代が十四人、五十代が七人、六十代が十人、七十代が二人、八十代が一人となる。もちろん異なった世代が学ぶことで、相互に刺激を与え、新たな知見を得ることはある。一方で、世代によって抱えている課題や、その学びの意欲には異なりがある。それは学習内容にも反映されるだろうし、学習会に講師を招聘する場合は、講師選定にも関わってくる。ただ、組の学習会などで、講師の紹介はあっても、講師選定の理由を詳らかに説

明することはまずない。本来は、世代によって抱える課題が違うからこそ、「なぜこの講師のもと、こういった学習会をするのか」といった事前の問題意識の共有が大切になってくるはずである。それを踏まえるからこそ、世代間の学び合いに意味がもたらされるのではないだろうか。その意味で、世代間からみる意識の違いを、まずは本アンケートを通して検証したい。

全体を通して言えることは、若年層の方が共同教化に対しては好意的且つ意欲的であるということである。これは危機意識の裏返しとも言えるだろうが、三十九歳以下で共同教化を「不要」と答えたのはゼロで、数字にも顕著である。また、学びに対する意欲は、四十四歳以下が軒並み高い。総じて、若年層は共同教化に対しても、また学びに対しても意欲的であると言える。（その意欲あるいは積極性を継続できるような学びの場を提供していくことが必要であると考えられる）

そして、全体の六割弱を占め（四十代も加えると全体の七十五%となる）、多くが住職として現場感覚を持ち最前線で活動している中間層（五十代・六十代）については、際立った数字は出ていない。共同教化についても、学習意欲に対しても、その数字は若年層よりは落ちるが、老年層よりは高い、といった傾向にある。ただし、【問3】に対しては、六十代（特に前半）の回答率が高い。すなわち、六十代は五十代に比較して、学びへの意欲が高いのである。これは、推測を逞しくすれば、寺院の後継者が育ち、法務等の分担が進み、時間にゆとりが出来ることに起因しているのかもしれない。

対して、四十代後半から五十代は時間的ゆとりも少なく、眼前の為すべき仕事に追われているとも言えよう。し

かし、全体の数からいっても、この中間層の活躍が、共同教化の推進、寺院活性化の原動力となることは言うまでもなく、この層に寺院や教化の現状における改善点等（不満など）を聞き取りしていくことも有効性を持つと考えられる。

年代別アンケートの全体を通して感じたことは、やはり立ち位置によって課題が異なるということである。そこで、細かく年代を分けながら学習会の場を提供することも今後必要となってくるのではないか。ただし、年代を分けてついても、全体として継続性を持つような課題共有が重要である。特に、多忙を極める中間層にこそ、有意義な学びの場が必要であると思われる。

また、若年層の意欲や意識が、年齢を重ねるにつれ減退していくというのが、アンケートの全体から読み取れる傾向である。その理由は様々あるが、その一つに、「慣れ」からくる仏事の因習化・慣例化があるのではないかと考える。厳しい見方をすれば、経験を重ねることにより、日々の法務や教化が流れ作業化し、緊張感や意欲を失っていくのである。

こういった状況を楠信生は寺離れの在り方を論じる中で、
ただ問題とすべきは、「寺から仏法が消えたのではないか」、寺離れの前に、寺の民衆離れがあったのではないかと指摘している^⑩。

また、参議会議員の中山克宏（名古屋教区）は、次のように述べている。

「門徒離れ」と言われますが、門徒は、真宗 から離れるのではありません。住職や僧侶の姿勢を通して

「宗門」から離れるのであります。¹¹⁾

私たちはこの声をどのように受け止めることができるだろうか。若年層の積極的な数字の裏側に、

「寺離れ」や「墓じまい」が進み、「寺院消滅」の可能性が見込まれている現状に、寺院は置かれている¹²⁾

という危機感があるのだとすれば、それは単に社会変容や時代の変化だけが理由ではない。我々、寺院・僧侶の仏教離れ、民衆離れが、あるいは日々のその姿が、民衆の寺離れを起こしているのである。であるならば、若年層の意欲を減退させず、継続させていくこと、この点に注力していく必要がある。

実は共同教化を考える上で、一つ大切な視点がここにある。寺院間にせよ、寺族門徒間にせよ、寺院を預かる者、仏教に親しむ者の真宗仏教への飽くなき学びを促すことが、共同教化の大きな役割となる。

経験という名の因習化や慣例化は、一つ一つの所作や動作を疎かにし、一人一人の声に耳を傾けることを遮ることがある。そこに緊張感を与える効果が共同教化にはある。相互扶助、情報交換という面が共同の語からは想起されやすいが、自身の立ち位置を今一度、顧みるような鏡としての役割を持っていると言える。

また、「学びの導線」という点から考えれば、若年層には学びの継続性を重視した学習の場が、中間層には、緊張感を涵養させる学習の場¹⁴⁾が、そして老年層には次世代へと繋ぐ学習の場の必要性が、本アンケート結果から読み取ることができるのではないだろうか。¹⁵⁾ここでの課題点は、次稿にて、同朋会運動の歴史を検証しながら考えていきたい。¹⁶⁾

五 回答コメントから見る意識

本アンケートでは二か所、任意でのコメント欄を用意した。一つは【問1】の理由を記すもので、もう一つはアンケート末尾のフリーコメント欄（以下フリー欄）である。その回答数は以下の通りである。

【問1】

〔必要〕 コメント記入数…一九五（八七・四％）

〔不必要〕 コメント記入数…三三（九一・六％）

〔どちらでもない〕 コメント記入数…一一（七・一％）

【フリーコメント欄】

コメント記入数…九〇（二二・二％）

記述式回答は言うまでもなく回答者の思いが直接反映されているので、よりリアルな声として捉えることができる。今、そのすべてを拾い上げここに紹介することはできない。よって、コメントの傾向を整理しつつ、今回は特に共同教化に対する懸念、あるいは消極的な意見について、具体的に取り上げたい。というのも、共同教化の実現

に対して、何が目詰まりを起こしているのか、ここに注目したいのである。

五―一 問1に対するコメント

まず【問1】の「必要」に対するコメントからは、二つの特徴をあげることができる。一つは、寺院が置かれている現状への危機感である。「一寺院では限界がある」「今後寺院の運営はさらに困難になる」「寺離れがすすんでいる」といったコメントが多く見受けられた。そして二つに、その危機感に対して、共同教化の必要性が共有・運営・交流の三点から説明されていることである。特に、情報共有については、「情報、教学の共有」「同じ教化方針・課題をもつ寺院や個人が、教化のノウハウ・情報・課題を共有し、互いに協力できることは必要だと感じる」「横のつながりというか情報交換があってもいいと思います」というように、回答者の多くが言及している。

その中で、ごくわずかであるが、「一人の思いはおのがはからいによるが故に傾くもの。互いが互いに学ぶことにより、より正しき信心を歩めると考えるから」や「問いを確かめていくには他者の声を聞き、共に尋ねていくことが大切だと思われる」といった、自身の歩みの上に、共同教化の必要性を見出す意見もあった。

次に【問1】の「不必要」「どちらともいえない」に対するコメントは、共通点が多くあり、大きく三つに分けることができる。一つに、「日頃から「共同」には、ほど遠いものがある」や「各寺院ごとに法務に対する温度差が大きいと思う」というような、実現可能性を問題視する回答である。二つに、「スタッフの負担が重すぎる」や「共同という名のもとに行っても一部の人間に負担が大きいかかってしまう」という過重負担、負担偏重への問題

意識。三つに、「そもそも「共同教化」という言葉が浸透していない」という、共同教化という言葉自体に対する理解度に起因している。

五―二 フリーコメント欄

フリー欄については、共同教化に対する是非を論じるものが大半であるが、個別の質問に対する補足説明や、所属組に対する思い、本アンケート自体に対する疑義など、さまざまな意見を見ることが出来る。フリー欄は、特に自由度と任意度が高いため、一つ一つのコメントも長文で、内容も密度が高い。

特に共同教化の実現という点から考えた場合、実際の住職・寺族がどういった懸念・疑問・課題を持っているのかを把握することは必須である。その点、このフリー欄はともて有意義な材料を与えてくれる。

よって、ここからはフリー欄を基軸としながら、回答者が持つ、共同教化に対する疑問・課題点を中心に整理したい。以下、主要な課題について五つの項目(①～⑤)を立てた。冒頭に実際のコメントを紹介しながら論をすすめていきたい。

【①共同の実現可能性】

- ・ 組内各寺院の意識の差が大きく共同で事業を行う意味があまりないと思う
- ・ 組という組織がきちんと機能していれば、有効であるが、名古屋教区の場合はどうか…
- ・ 寺院間の温度差・意識の違いにより簡単ではない

共同教化に対する懸念事項の中、最も多いのが、「共同」に対する声である。特徴的なのは、意識調査の【問2】で六割近くが共同の範囲を「寺院と門徒」と回答しながら、ここでの懸念相手は、ほぼ対寺院にある点である。内容的には、教化に対する意識の違い、あるいは温度差である。では、どういった点に意識の違いや温度差が現れるのか。コメント内にその具体例までを記述している回答者はいないが、フリー欄を一読するだけでも、その意識の違いはまざまざと感じる。また「共同」に対する意見として、興味深かったのは、「一寺院での教化」あるいは「一人一人への教化」という、一対一の教化をあげる点である。これは「市野・二〇二〇」でも論じたが、確かに真宗における教化とは、

人間の生活はそれぞれ人によって全部違いますから、具体的にでなければならぬ。(中略) その意味で布教は一対一の勝負になります¹⁸⁾

にあると言える。しかし共同教化の持つ願いの一つとは、その一対一の教化に専念できるような環境を整えるためにこそあると言える。この点は、後にも課題として取り上げるが、「共同教化」の言葉自体への理解にも関わってくることである。

いずれにしても、フリー欄は「共同」への懸念が多く、特に「組」という枠組みについての言及が目立つ。よって次に「組」に対する意見を確認したい。

【2】組という枠組みについて

・組を単位とするには問題が多い(各住職の意識・方向性がバラバラなど)

- ・ 組の中で行うものも必要であるし、組の枠を超えて行うものがあってもよいと思う
- ・ ある程度、規模背景を同じくするもの同士が集まらない事には足並みはそろわない。組という器は、それぞれの置かれている環境が異なりすぎる

- ・ 組内住職の教化に対する意識には温度差がある。無理に組でまとまろうとすると、時に足の引っ張り合いが始まる。意識のある住職が切磋琢磨されながら、共同教化の場を構築していくことが大切だと思う

筆者は本アンケートを実施する上で、組の重要性をたびたび説明した。そういった背景もあり、回答者の多くが組に対して言及している。しかし、フリー欄には組に対する肯定的なコメントはほほえない。実態調査の中で「組が共同教化の実践に相応しい組織であるか」という設問がある。「思わない」が一九（二八・〇％）で、「思う」が二四九（五八・七％）と、数字上は「思う」が大きく上回っている。にもかかわらず、コメントは「組」に対しての懸念を表している。かなり辛辣に具体的な内容にまで踏み込んで言及している記述もある。しかしその具体性は、同じ組に所属しているからこそできる状況把握に基づくものであり、やや皮肉的ではあるが、組における情報は共有の結果である。ただ、現場を担う僧侶は、そこには超えがたい壁があると感じているようである。それが【問1】の「どちらでもない」への回答数一五三（三六・〇％）にも繋がっていると考えられる。

さて、その現実を前に、フリー欄の意見は二つの方向性をもっている。一つは、繰り返しになるが、共同教化という理想に対する組や寺院関係の実状を訴える内容である。二つには、その組に限定されない共同教化の模索、必要性への提言である。たとえば、組内を小さなブロック分ける方法や、寺院の枠を超えた（NPO法人など）共同

など、より弾力的に捉え直すべきことが記されている。ただ、それらは単なる組への反発ではなく、組を基盤としながら、組の枠組みを超えるような関係の構築を目指している点は注目したい。⁽¹⁹⁾

全体を通して組への意見は一見ネガティブな印象を受けるが、言葉を換えれば相互の状況を良く知りえている結果とも言え、組がある程度機能していることの証左ともなる。また、組の在り方を考える上で、先のモデル組を選定し、より深度のある聞き取りをすることが、他組にとっても良い共有項目になると考えられる。⁽²⁰⁾

【③教義・教化の画一化への不安】

- ・ それぞれのお寺、個人の教化を支えることが目的であり、教化の義務化、画一化になってはならない
- ・ 共同教化で誤った方向に進んだ場合、そのグループの誤りはどう正していくのか
- ・ 共同教化により誤った教義理解の深化に進むおそれがある

次に教義や教化の画一化、あるいは誤った教義理解に対する懸念を挙げるができる。共同・単独の別を問わず、私たちが誤った（偏った）理解に陥ることはある。それは現代だけの問題でなく、親鸞の晩年の消息や『歎異抄』を見れば、すでに親鸞在世から起こっていた課題であろう。大切なのは、異義を無くすことではなく、誤った理解から如何に自身を修正していくのか、という点にある。たとえば、蓮如は、

蓮如上人仰られ候。物をいへいと仰られ候。物を申さぬ者はおそろしきと仰られ候。信不信ともに、ただ物をいへと仰られ候。物を申せば心底もきこえ、又人にもなをさるるなり。ただ物を申せと仰られ候⁽²¹⁾
仏法をばただより合いより合談合申せ⁽²²⁾

と物を申すべきこと（談合）を勧めている。つまり、共同をどういった場をしていくのか、ということが大切であり、むしろ教義教化の画一化、誤った理解は、共同であるからこそ是正・修正されていくものであると言える。

【④ 過重負担】

- ・ 現場にいる住職たちは法務や寺の管理等に手一杯の方が多と思います
- ・ 自坊の法務が多忙すぎて体力的につらいという現実がある

・ 兼職しているため、自坊のことだけで目一杯の状況。これ以上寺に関わる仕事を増やすことができない
意識調査【問1】の「必要」への回答理由の一つに運営面における役割分担をあげた。新規・既存の活動にかかわらず、場を運営していく上での協力体制の構築が共同教化を必要とする理由の一つであるわけである。一方、ここではそれらが「負担」として認識されているのである。これは「これ以上寺に関わる仕事を増やすことができない」という回答からも窺えるように、共同教化が「新たな試み」とし受け止められていることによると考えられる。この点は共同教化に対する理解が人によって幅があることを物語っている。

【⑤ 共同教化とは何か】

- ・ 共同教化がどんなものなのかが、消化できていない
- ・ 共同教化という言葉がすんなり入ってこない
- ・ 共同教化というものが何なのかわかりません
- ・ 共同教化の定義が良く分からない

共同教化という言葉は宗門の歴史で言えば、昭和四十一年の教化条例の公布から五十年以上にわたって使用され、その背景には同朋会運動との関係がある。しかし、その言葉は共通化できるほど浸透していない。更に、ここに挙げたようなコメントは【問1】の「どちらでもない」への回答理由にも多く見ることが出来る。加えて、その回答者の多くが六十代以上の世代なのである。つまり「共同教化」とは忘れ去られた言葉ではなく、当初から馴染みあるものとして浸透しなかったのである。すなわちこれまで本格的に共同教化について学ぶ機会はなかったと言える。筆者は本論冒頭に共同教化を「共同教化とは、諸仏如来にともに教化きょうけせられていく、その場の共有と創造」と定義したが、私たちは、その言葉の出発点から学んでいく必要がある。

以上、フリー欄のコメントを中心に、住職・僧侶が持つ、共同教化における懸念・課題点を五つに分けて確認した。では、こういった生の声にどう向き合っていくべきか。理想と現実の狭間で揺れ動く意見に、教義的側面だけで説明することは意を得ない。且つ、現実にのみ即した形では、その本来性を見失ってしまう。そこで、同じようにその狭間で揺れ動いた先人の声に耳を傾けることが何より示唆的であろう。その歴史については、次稿にて、同朋会運動の第一次五カ年計画期を中心に検討したい。

六 モデル組としての第五組

組別・年代別集計の結果から、共同教化を考える上で第五組がモデル組に相応しいことは既述の通りである。そ

ここで、第五組の所属寺院に対し、より詳細な聞き取りを行ったので、その内容を検討したい。第五組の所属寺院には次の七項目のアンケートを行った。

- 【問1】 共同教化という言葉からイメージすること
- 【問2】 組という組織の持つ「長所・利点」
- 【問3】 組という組織が抱える「短所・欠点・改善点」
- 【問4】 組を構成する一員として心がけていること
- 【問5】 寺院・仏教の「現在」をどう考えているか
- 【問6】 寺院・仏教の「今後」をどう考えているか
- 【問7】 フリーコメント
- 回答数：一〇（八三・三％）（問7の回答数は六）

以下、各設問の回答から、第五組の共同教化に対する意識について整理検討したい。

【問1】 共同教化という言葉からイメージすること

第五組の所属寺院のほとんどが、共同の範囲を「寺と寺」・「門徒と寺族」の二通りにみている。その中で特徴的だったのは、「寺と寺」に共同をみるとき、その教化は、寺院活動における相互扶助を意味する。たとえば「一寺

院ができないことが、組単位となるときできることが多い」や「複数の志を同じくするものとの協力関係で行われる教化事業のイメージ」といった回答のごとくである。一方で共同が「門徒と寺族」を意味する場合、その教化は「僧侶と門徒との関係において、教えるもの、教えられるものという関係のみならず、僧侶自身も門徒から育てられているという大事な側面もあり、僧侶共に教化されるというイメージ」や「僧侶とご門徒が共に学ぶこと」といった内容を持つ。すなわち、僧侶ともに教化きょうけされるという意味で共同教化を捉えているのである。しかし寺院・僧侶が共に教化されるというような回答はなかった。²⁴ 実は、こういった傾向は第五組だけでなく、アンケート全体にも共通する。

「共同」の語が何を対象としているかによって、「教化」の意味することが異なるのである。これは、教化を教義上の術語として捉えるか、あるいは実践の上で捉えるかによる違いであると言える。ただ、回答者は意識的にこの使い分けを行っているとは考えにくい。とするならば、共同教化の今後を考えていくとき、回答にはみられない寺院運営における門徒との相互扶助、寺院寺族が共に教化される共同教化、というような視点こそが重要となってくるのではないだろうか。

【問2】組という組織の持つ「長所・利点」

共同教化の基盤として組を考えたとき、どういった利点・長所があるのか。ここで回答者全員が、「同じ道を歩む者を身近に感じ、お互い、助け合う意識が長年の付き合いにより出来、また、それを実現する事が可能な所」や「それぞれの寺のまたは住職の考える運営のしかたを学べると同時に助け合い協力しあうことができる」と相互扶

助の機能をあげている。また「それぞれ教化に対する思いや願いは違うが、組全体として調整しながらサポートできる体制が出来ている」と、実際の実感として相互扶助の機能が第五組には浸透しているのである。また、世代に捉われないつながりが構築できることへの意見が散見された。これが組の長所として認識されている点は、第五組の所属寺院間の関係性を示す一例とも言える。そういった関係性が、共同教化に対する積極的評価の要因につながっていると考えられる。

【問3】組という組織が抱える「短所・欠点・改善点」

問3では回答者の多くが改善点について言及している。その改善点は大きく次の三つに分けることができる。

〔一〕所属寺院間における対話の在り方

〔二〕事業のマンネリ化

〔三〕組内における他の組織との連携

〔一〕については、八割の寺院が回答している。「少数意見が通らなくなる」や「仲良しごっこが続いてしまう」といった現実に対し、寺院間対話の持ち方が改善点として挙げられている。たとえば「少数意見を取り入れ、問題を起こし困った事があれば、切り捨てるのではなく丁寧に聞いて」や「話し合いの時間をたくさん持ち、問題点課題点の共有」といった意見である。次の問4にも同様の記述を見ることができ、組内寺院がどういった関係を構築しているか、共同教化の実践の大きな前提となっている。

〔二〕は実際の組内事業のマンネリ化への懸念である。ただ、マンネリ化が改善点にあがること自体が組による

教化事業が一定の持続性を持っていることを明かしているとも言える。

【三】の他の組織とは、坊守会や門徒会などを指す。この【三】への回答数は一カ寺のみであったが、重要な指摘である。またこれは単に組や教区という組織だけの問題ではない。一寺院の中でも同様の問題は起こっている。⁽²⁵⁾ 共同教化の「共同」をどう考えていくか。「寺と寺」といったときに、住職以外の寺族はそこに含まれているのか。あるいは、一つの寺院の中で共同は成り立っているのか。組という組織に向き合うからこそ、所属寺院の在り方もまた問い返されてくる。

【問4】組を構成する一員として心がけていること

先の問3の改善点とも重複する結果となった。回答者の八割が寺院間の対話の在り方に注意を払っている。「常にかかれた組であること。意見が言い合えて理解し合える組であること」というコメントが象徴するように、単に協調性のみを重んじるものではない。もちろん回答の中には「和を保っていききたい」という意見もあるが、その「和」とは、決して「仲良しごっこ」ではない。いくつかの回答を紹介すると、

仲間として少数の意見を取り入れる

組の教化事業のマンネリ化や簡略化、あるいは回数減少など、楽な方向に流れていかないように踏み止まる様にアピールしている

他の住職との考え方が異なる場合、自分の意見を述べると同時に、他の住職の考え方を照らし合わせて結論を出すようにしている

よく聞き、よく見て、温度を大切にする

といった意見がある。対話可能な関係性・雰囲気を醸成するとともに、他者の言葉に耳を傾けること、また言うべきことは臆せず発信すること、に注意が払われている。加えて「開かれた組」であるためには、情報の公開共有も必須である。

【問5・問6】寺院・仏教の「現在」と「今後」をどう考えているか

この二つの設問から、所属寺院の現状と今後を回答者がどう認識しているかが浮き彫りとなる。特に、共同教化を主題としたアンケートの中で、寺院の今後に対してどのような回答がなされているのか興味深い。

寺院・仏教の現状に対しては、総じて厳しい見方を持っている。特に回答者の八割が寺院の運営面に言及し、「寺離れ」や「核家族化」をその理由に挙げている。一方で、寺院の世俗化や世間の要求に応える寺院となっているのか、という指摘もある。

では、このような現状認識に対して、各回答者はどのような展望を持っているのか。筆者の期待とは裏腹に共同教化への言及はなく、また、多種多様な意見が見られ、カテゴライズできるような共通性もなかった。すなわち、寺院・仏教への危機感には共通、共有されるものがあるが、その対応策や展望となると、具体的なイメージには及んでいないようである。時代との調和、本山・教区と末寺の連携、地域との連携といった意見が並ぶが、どれも具休性には欠ける。また、「人は必ず教えを求める。その第一号に住職がなること」や「宗祖は「証道いま盛りなり」と言い切られた精神を今一度たずねるべきである」といった、問題意識を寺院や自己の内側に見据えた意見もあっ

た。

【問7】フリーコメント

最後のフリーコメントは、半数の寺院から回答を得た。自由記述欄ということもあり、各設問だけではカバーできなかった共同教化についての回答者の見解を知ることができる。

興味深いことに、回答者の半数が教団・本山への要望を訴えている。⁽²⁶⁾ 教団が下意上達の組織として存立しているか否か、そこに疑問や疑念を抱いているのである。それは同時に、組が持つ「教区・本山へ折衝できる組織」という役割を考えれば、当然の要望であり、疑念でもある。

そしてもう一つは、「こういう非常事態に真宗仏教の存在感を発揮する、あるいは、人々のコロナ禍による不安に明確な道筋を示せなければ、存在意義を失ってしまうのではないだろうか。」という意見に象徴される。教団が真宗仏教の教団としてその存在を発信して欲しいという要求である。

次に、共同教化への期待や理想が次のように示されている。

各寺院が「個」では出来ないことを組織的に出来る教化活動を進められる「組」が理想だと思う。

共同教化の一つは「底辺の底上げ」だと思うので、組でできないことは教区の助け（人材・金銭面）が必要になることもある。

あくまで組を基盤としながら、教化の底上げがはかられていく。そして組では実現できないような事案は、他組や教区、本山へと広がりをもっていく。まさに共同教化の一つの理想的な在り方を示している。ただ、そこに至るま

でに幾多の現実的課題を抱えているというのが、実状なのだろう。

七 おわりに

名古屋教区に限定したアンケートではあったが、教化という現場を最前線で担う、寺院、住職が「共同教化」に對して、どういった意識を持っているのか。本アンケートの実施により、様々なことが明らかとなった。以下、その要点を改めて整理し、併せて今後の課題を提示し、本論の結びとしたい。

総じて共同教化に對しては、好意的な意見が多い。特に寺院間の共有・運営・交流がその理由にあげられる。他方、実現可能な施策であるかどうかには、懐疑的でもある。その理由は何よりも寺院間の関係性にある。

たとえば、共同教化の「共同」については、「寺と寺」・「門徒と寺族」を想定している回答者が多い。ただし、その「共同」の関係性によって「教化」にどういった意味を求めているのか、ここには異なりが見られた。すなわち、「寺と寺」という場合、教化とは寺院運営面での結びつきを意味する。また、「門徒と寺族」を共同の範疇とする場合、教化とは、相互に教化せられていくような結びつきを意味している。このような傾向は顕著で、反対に「寺院間における相互教化」あるいは「門徒と寺族間における寺院運営」といった回答はほとんど見当たらない。そして、好意的に捉えられている共同教化の中で、実現への懸念材料として大多数の回答者を悩ませているのが、「寺と寺」の関係性である。⁽²⁷⁾つまり、寺院間の結びつき、すなわち「組」が共同教化の機能を発揮できるような状

況にあると認識している回答者は極めて少ないと言える。

そこで、本論では、組別集計の結果から共同教化のモデル組として、名古屋教区第五組を選定し、より深度のあるアンケートを行った。その結果は既述の通りであるが、「開かれた組」として、その一員を担う回答者がどうあるべきか、モデル組の中でも課題となっている。

さて、今後への展望であるが、一つには既存の「組」の在り方について、改めてその意味を問い返す必要性を感じる。下意上達の組織としての役割、寺院間の関係について、組内学習の見直し点検等、やるべきこと、再考すべき課題は山積している。また、組を考えることは同時に、寺院に所属する僧侶としての自身を問うことであり、また宗門教団を問うことでもある。この点は、既に歴史が教えてくれている。

同朋会運動が最も熱を帯びていた第一次五カ年計画（昭和三七年から昭和四一年）の中、宗門は各研修の実施と並行して調査点検も行っている。そこで幾度となく問題となっているのが、育成員の存在である。すなわち住職である。その問題は正に先に挙げた「住職や僧侶の姿勢を通して『宗門』から離れるのであります」という声そのものである。こういった状況に対し、育成員の共同学習等を実施し、その解決の糸口を探ろうとしている。その具体的な内容については次稿にて詳しく論じていきたい。

また昭和三九年から四〇年にかけて、『真宗』の紙面上で大きく教団論が扱われている。特に「同朋教団」を一つのキーワードとしながら、教団が同朋として存立しているか否かが議論となっている。これらは、ともに同朋会運動の実践の中で、生起、醸成された課題である。

加えて、この第一次五カ年計画中の『真宗』には、座談会の報告、研修のルポタージュ、同朋会運動の担い手による寄稿文など、同朋会運動によって浮上した諸課題に対する様々な声を聞くことができる。たとえば、地域の同朋会の担い手が自由に寄稿することのできる「私の発言」⁽²⁸⁾には、次のような住職の声が寄せられている。

末寺住職のすべてが信仰者としての温かさ⁽²⁹⁾とたしかさを⁽³⁰⁾見につけてこそ、宗門の発展も考えられることだと思う。

同朋会運動の一つの功績は、教団や住職、僧侶の見られなくなかった姿が露わとなったことである。当時の人々は、その姿に向き合いながら、自身の信仰を確かめていったのだろう。住職や寺院とは一体どうあるべきか。今も昔も変わることない命題に対し、ここでは「温かさ」とたしかさ⁽³¹⁾という言葉で語っている。「温かさ」は、誰もが迎えられる場所を、「たしかさ」とは安心して発言できる場所を意味していると見えよう。そして同時に、寺院に限られた場になり、更に場の空気を優先させるような状況になってはいないかという、私たちへの問いかけともなる。

本論で明らかとなった共同教化に対する現況を踏まえ、共同教化の今後の展望について、次稿にて同朋会運動の第一次五カ年計画期間を中心に、その歴史を通して論じていきたい。

【凡 例】

一、敬称は省略した。

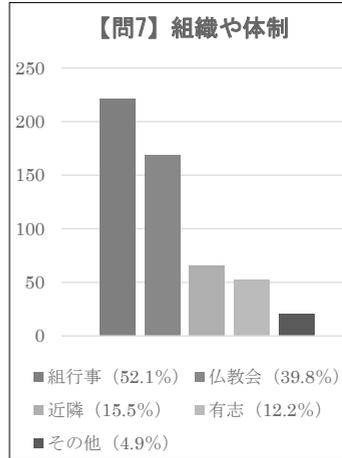
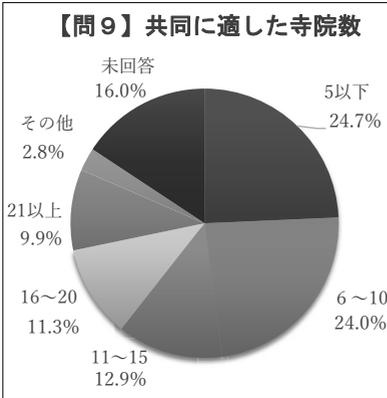
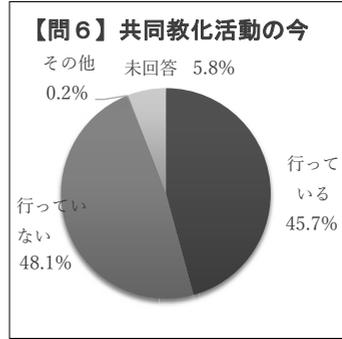
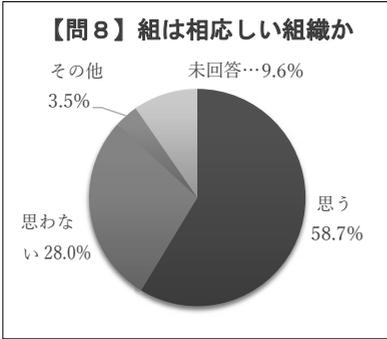
一、 出典や経典名等は以下の通り略記した。

『真宗大谷派宗憲』 ↓ 『宗憲』

『真宗大谷派法規総覧』 ↓ 『法規総覧』

『浄土真宗聖典全書』 ↓ 『浄真全』

一、 本論文で使用する「教化」とは基本的に「きょうか」と読む。「きょうけ」と読む場合はルビを付した。



註

(1) 『同朋仏教』第五六号 一〇三八頁

(2) 『宗憲』では教化について「本派の教化は、宗祖親鸞聖人によって開顕された教法を明らかにし、自信教人信の実をあげることを本旨とする」(『宗憲』第八十五条 『法規総覧』一三頁)とある。すなわち、真宗における教化とは、如来の教化(きょうけ)を根本としながら、僧侶が担うべき実践(自信教人信の実をあげる)として記されている。

(3) 現在、名古屋教区では「寺族」という呼称について、解放運動推進協議会を中心に、問題提起がなされている。寺族という言葉が身分的閉鎖性を持つのではないかという指摘である。寺族とは「寺院協会条例」第四章・第二十三条によると、寺族名簿に登録される者で、基本的には住職または教会主管者と同居する二親等以内の者、あるいは住職・教会主管者の血族で、僧籍を有する者と戸籍を同じくする者と規定されている。具体的には、寺院に住居する者、および住職・教会主管者の子供家族が寺族の範疇として想定されていると思われる。それ以外の者でも、「寺族、責任役員及び総代の同意を得た者」との一文があるが、認定者側に既述の寺族が加わっており、実際には住職・教会主管者の近しい親族が適応範囲内である。この「寺族」という呼称が、対門徒や対寺院出身者でない僧侶と区別する意味で用いられている。そこに潜在「寺族」という言葉を持つ特権意識や身分制度が指摘されているのである。本論では以上のような、問題意識を共有しながら、共同教化をテーマとする上であえて「寺族」という言葉を用いる。

(4) 共同教化の取り組みについては、具体的に寺院と寺院を切り結ぶことを目的とした調査であり、本論の目的とは異なるので、ここでは取り上げない。

(5) 実態調査結果についてもグラフ資料を本文末尾に添付した。

(6) そもそも『宗憲』では、「(組は)念仏者を育む同朋会運動のさらなる展開のための共同教化の単位として、常に同朋の公議公論に基づいて運営されなければならない」(『組制 第一条』『法規総覧』一三一頁)と、組を共同教化の単位として位置づけている。

(7) 本調査では、組の細かな実状までは把握できない。しかし、組の持っている特徴などは調査のフリーコメント等からも知ることができる。このアンケートをもとに、個別に組への聞き取りをしていくことで、それぞれの現場を担う住職の声を聞くことができるだろう。本アンケートは、その足掛かりとなるものである。

- (8) 無記名回答者が二十六名いるので、厳密には記名回答者が二十四歳から九十五歳ということになる。
- (9) 実態調査の中で、【現在行われている共同教化はどのような組織・体制のもとで行われているか】という設問の半数以上が「組の行事」と回答している。
- (10) 「空虚と満足、時代の変化の中で(上)」『南御堂』二〇一八年二月号
- (11) 第六十六回参議会の代表質問からの一節『真宗』二〇一九年十月号 四四頁
- (12) 『ともに生きる仏教 お寺の社会活動最前線』一五頁
- (13) 特に危機感や学びの意欲を寺族や門徒の枠をこえて、より多くの人々と共有していくことが大切であると思われる。座談会や教区や別院の主催のスタッフなどに積極的に関わることも有効であろう。
- (14) 組教導など組を代表するような役割を与え、他組と交流を持つことや、若年層時代の学びを、実践の「場」として創造していくことが期待される。
- (15) 次世代へと学びの場を繋ぐような、「伝える」という大切な役割が期待される。
- (16) 年代別研修については、すでに昭和三十九年二月頃から奉仕団向けには実施されている。また年代別研修は好評を得ていたようであり、特に「座談会が活発に進められる」や「世代的な問題が語りあえる」といった声が報告されている。(『真宗』昭和三十九年五月号 三頁)
- (17) 本来はコメントを一覧表にして閲覧できるようにすべきであるが、内容によっては個人を特定できるものもあるので、今回はコメントについては、特に必要なものを、適宜本文内に引用するに留めたい。
- (18) 高木宏夫「現代社会における真宗の教化活動」『真宗』昭和四一年六月号 一〇頁
- (19) 特に新たな広がりを意欲的に考えている回答者が、組を基盤とするような考えを基底に持っている傾向が高い。
- (20) 本論はこの点から第五組をモデル組とし更なる聞き取りを行った。
- (21) 『蓮如上人御一代記聞書』八六 『浄真全』五 五五一頁
- (22) 『蓮如上人御一代記聞書』二〇一 『浄真全』五 五八四頁
- (23) その理由は定かではない。ただ、同朋会運動以降、特に教化条例の公布(昭和四一年)にあたって、『真宗』誌上では、座談会等ではしばしば共通の認識のもと「共同教化」の語は使用されている。

(24) たとえば同朋会運動においても、第一次五カ年計画で、育成員の共同学習の必要性が提起されている。ここでの共同学習が何を志向するものであったのか、この点も検証する必要がある。

(25) 筆者は本アンケートの集計結果を教区内で報告した際に、アンケートの存在自体を知らない方々（坊守・門徒）に多く遭遇した。つまり、教区や組で行われている事業の情報が住職でストップしてしまうことがしばしばあるのである。まず足下のこのような状況から改善していく必要があるのではないだろうか。

(26) 実は同朋会運動の第一次五カ年計画でも、教団論が大きな議論の中心となっていた。末寺にとって門徒にとつて教団とはいかなる組織であるのか。組という組織を考える時、教団とは何かが必然的な問いとして惹起するのである。次稿にて、第一次五カ年計画中に議論された教団論についても確かめていきたい。

(27) ただし、単に寺院間の関係を悲観的に回答するだけでなく、その関係改善の必要性に言及する回答も一定数ある。本アンケートの意義は、あくまでも「現状認識」にあるが、その認識を通して、組を基盤としながら寺院間の関係改善へと、アプローチしていくこともできる。

(28) 昭和三八年二月から昭和三九年十一月合併号まで、約二年に渡り連載された、地域の同朋会の担い手による寄稿文。
「私の発言」四辻和夫「僧分の覚醒こそ先要 Ⅱ近頃の宗門のありかたにおもうⅡ」『真宗』昭和三九年一月号 三五頁
傍線筆者

資料A 組別集計		Q1共同教化は必要か		Q2共同の範囲について						Q3施策を定むたか			Q4精進の存在の有無		Q5精進に期待する継続・役職										
手数	送達数	年齢	必要 どちらか	不要	未記入	大谷	門徒	超然	以外	その他	未記入	したい	しない	その他	未記入	必要	不要	その他	未記入	教区副長	教導	組長	住職	その他	
総数	424(2.5%)	24~95(2.6)	223	153	36	13	280	245	147	41	30	22	248	133	5	38	270	122	6	27	177	86	57	106	38
各名数教区			32.8%	22.5%	5.3%	1.9%	41.2%	36.1%	21.6%	6.0%	4.4%	3.2%	36.5%	19.6%	0.7%	5.6%	39.8%	17.3%	0.8%	3.3%	26.1%	12.6%	8.4%	15.6%	8.9%
フアード回答者			52.9%	36.0%	8.4%	3.0%	66.0%	57.7%	34.6%	9.6%	7.2%	5.1%	35.4%	31.3%	1.1%	8.9%	63.6%	28.7%	1.4%	6.3%	41.7%	20.2%	13.4%	25.0%	8.9%
1組	30	26(7%)	31~90(1)	12	10	4	0	17	18	7	2	2	12	9	0	5	15	10	0	1	8	8	4	5	0
2組	30	20(6%)	35~70	14	4	2	0	13	17	10	2	0	1	12	7	0	1	15	3	0	2	9	5	5	5
3組	24	20(8%)	38~70	12	6	2	0	14	13	7	3	1	0	15	3	0	2	11	7	1	1	7	3	2	7
4組	41	7(1%)	43~64(2)	1	5	1	0	3	3	2	1	1	1	1	5	0	0	7	0	0	1	0	0	0	0
5組	12	11(92%)	32~71	11	0	0	0	10	5	3	1	0	1	10	0	0	1	10	1	0	0	7	4	3	7
6組	21	19(90%)	39~74	12	4	2	1	15	12	7	2	1	0	11	6	0	2	15	3	1	0	11	5	1	6
7組	22	16(7%)	31~71	9	6	1	0	11	11	4	0	1	0	10	4	0	2	11	5	0	0	8	5	2	6
8組	24	5(21%)	24~65	3	2	0	0	2	5	2	1	1	0	2	2	0	1	3	1	0	1	1	2	1	3
9組	24	20(8%)	32~71	9	8	3	0	8	3	2	1	0	2	8	9	0	3	10	7	0	3	5	4	4	
10組	15	20(13%)	46~55	0	2	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	1
11組	16	10(62%)	31~73(1)	4	2	3	1	5	5	2	0	2	0	4	6	0	0	4	6	0	0	3	2	1	1
12組	28	20(7%)	40~95	10	6	3	1	13	9	6	1	1	2	10	9	1	0	12	8	0	0	6	1	3	2
13組	29	10(34%)	35~66	6	2	1	1	8	6	2	1	0	1	7	2	0	1	8	1	0	1	5	5	2	3
14組	30	22(7%)	43~77(1)	4	6	1	1	12	16	10	4	5	1	17	3	0	2	18	2	0	2	14	8	2	6
15組	13	8(61%)	37~72(1)	4	4	0	0	6	3	4	3	1	1	4	3	0	1	5	2	0	1	4	1	1	2
16組	10	10(100%)	45~68(1)	2	4	2	2	4	6	2	0	1	0	3	4	0	3	3	4	0	3	2	0	0	2
17組	6	5(83%)	51~72	1	3	1	0	4	3	1	0	0	1	3	2	0	0	3	2	0	0	2	1	0	0
18組	18	18(100%)	33~61(1)	12	6	0	0	13	7	9	0	1	0	10	5	1	2	13	3	2	0	9	7	4	5
19組	21	8(38%)	39~69	1	6	1	0	2	4	2	0	1	0	2	6	0	0	2	5	0	1	3	0	2	2
20組	37	26(70%)	33~90(1)	14	11	0	1	19	17	7	1	3	2	18	4	1	3	19	4	1	2	11	4	2	7
21組	49	36(7%)	34~81	16	17	1	2	27	28	13	6	1	1	23	12	1	0	24	10	1	2	18	2	4	4
22組	23	12(52%)	44~69	6	6	0	0	11	5	6	1	0	0	8	4	0	0	8	4	0	0	5	4	1	2
23組	20	10(50%)	33~74(1)	6	4	0	0	4	4	4	2	1	2	5	4	0	2	6	2	0	2	2	2	4	3
24組	9	6(67%)	42~74	2	2	2	0	3	3	2	1	0	1	5	0	0	2	4	0	0	2	4	0	1	0
25組	17	6(35%)	53~70	3	2	1	0	3	2	2	1	0	1	5	0	0	1	3	0	0	1	3	0	0	1
26組	17	16(94%)	35~76(6)	10	3	2	1	9	6	5	2	1	0	13	1	0	2	12	3	0	1	8	2	2	8
27組	10	8(80%)	38~78	3	5	0	0	6	6	2	0	0	0	4	3	0	1	6	2	0	0	3	2	3	4
28組	13	9(69%)	31~80	5	3	1	0	6	4	3	0	0	0	8	1	0	0	5	4	0	0	3	1	2	0
29組	9	9(100%)	45~65	5	3	1	0	7	5	4	1	0	1	5	4	0	0	5	4	0	0	1	1	2	0
30組	30	14(47%)	39~74	7	4	4	2	1	10	0	7	2	2	0	8	5	1	0	8	4	0	2	8	3	0
31組	19	6(34%)	53~72(6)	6	3	3	0	9	3	6	2	0	0	6	2	0	1	8	1	0	0	5	1	1	2
32組	11	6(54%)	45~62(2)	3	3	0	0	5	3	3	2	0	0	3	2	0	1	3	3	0	0	0	2	0	1

資料A 組別集計		OR数化活動を行っているか		OT 組織や体制について		OR組は共同教化に相応しいか		OR共同教化に最も適した寺院数は					ORの近隣生活団体について										
寺院数	運営者	年齢	いる	いない	その他	未記入	進行中	仏教宗	近隣	有益	その他	無し	この他	未記入	5以下	6-10	11-15	16-20	21以上	その他	未記入		
総数	424(62.5%)	24~95(26)	194	204	1	25	221	169	66	52	21	249	119	15	41	105	102	55	48	42	12	68	
名古屋地区全体		28.6%	30.0%	0.1%	3.6%	32.5%	24.5%	9.7%	7.6%	3.0%	30.7%	17.2%	2.2%	6.0%	15.4%	15.0%	8.1%	7.6%	6.1%	1.7%	10.6%		
フナーン団舎の方		45.7%	46.1%	0.2%	5.8%	52.1%	39.8%	19.5%	12.2%	4.5%	36.7%	26.0%	3.5%	9.6%	24.7%	24.0%	11.3%	9.5%	2.5%	16.0%			
1組	30	20(67%)	31~90(1)	4	20	0	2	6	5	3	2	1	14	11	1	7	9	0	1	3	0	6	
2組	30	20(67%)	35~70	12	7	0	1	12	7	5	3	2	1	12	7	0	1	4	3	2	1	4	
3組	24	20(83%)	38~70	8	12	0	2	4	7	4	0	0	9	9	1	1	7	3	3	3	2	0	2
4組	41	7(17%)	43~64(2)	2	3	0	2	1	3	2	1	0	6	6	0	1	1	4	0	3	0	2	
5組	12	11(92%)	32~71	8	3	0	0	9	9	0	2	0	10	0	0	1	2	2	8	0	0	0	
6組	21	19(90%)	39~74	11	8	0	0	12	7	2	2	1	16	2	0	1	3	3	5	4	1	0	
7組	22	16(73%)	31~71	6	10	0	0	7	4	2	3	1	14	2	0	0	4	5	4	1	1	0	
8組	24	5(21%)	24~65	2	2	1	0	2	1	0	0	3	0	1	1	2	1	1	1	1	1	2	
9組	24	20(83%)	32~71	8	9	0	3	14	13	8	2	2	13	4	0	3	3	2	0	7	0	5	
10組	15	21(52%)	46~55	2	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	1	1	1	0	2	0	0	2	
11組	16	10(63%)	31~73(1)	4	6	0	4	5	5	2	1	0	8	0	0	5	1	2	0	0	0	2	
12組	28	20(71%)	40~55	5	13	0	2	7	7	3	0	1	5	1	0	4	6	6	2	0	0	4	
13組	29	10(34%)	39~66	8	1	0	1	8	7	3	2	1	4	3	2	1	2	2	0	1	1	2	
14組	30	22(73%)	43~72(1)	6	12	0	4	8	6	4	3	3	19	7	0	3	1	8	1	0	1	3	
15組	13	8(61%)	37~72(1)	2	6	0	0	4	3	1	0	0	3	2	0	3	1	1	0	0	0	3	
16組	10	10(100%)	45~68(1)	1	7	0	2	1	1	0	0	4	2	0	4	2	4	0	0	0	0	4	
17組	6	5(83%)	51~77	2	3	0	0	1	2	1	0	2	2	0	1	1	3	0	0	0	1	0	
18組	18	18(100%)	33~61(1)	12	6	0	0	12	5	0	0	12	2	2	2	0	2	3	10	0	1	2	
19組	21	8(38%)	39~69	2	6	0	0	1	2	1	1	0	1	6	0	1	3	1	0	0	1	3	
20組	37	28(76%)	33~90(1)	11	14	0	1	13	7	1	3	0	21	4	0	1	8	5	0	5	6	0	2
21組	49	38(77%)	34~81	26	8	0	2	35	19	5	5	1	27	4	2	3	8	4	3	3	7	3	8
22組	23	12(52%)	44~69	7	4	0	1	8	9	2	3	0	5	4	1	2	7	3	3	0	0	0	1
23組	20	10(50%)	33~74(1)	2	8	0	0	0	3	2	2	0	3	3	1	1	5	3	0	1	0	0	2
24組	9	6(67%)	42~74	3	2	0	1	4	1	0	0	0	3	2	0	1	1	2	0	1	0	1	
25組	17	6(35%)	53~70	3	2	0	1	3	1	0	0	4	2	0	1	1	3	1	0	0	0	1	
26組	17	16(94%)	35~76(6)	6	10	0	0	9	5	3	2	1	11	3	1	1	4	0	2	7	0	0	
27組	10	8(80%)	36~73	5	3	0	0	5	5	1	3	2	5	1	0	2	1	5	1	0	0	3	
28組	13	9(69%)	31~60	4	5	0	0	5	5	2	2	0	8	1	0	1	3	1	4	1	0	0	
29組	9	9(100%)	45~55	5	2	0	2	7	6	5	3	2	7	0	0	2	2	6	0	0	0	1	
30組	30	14(47%)	39~74	3	9	0	0	6	5	2	2	2	7	1	0	1	4	3	0	2	1	2	
31組	11	9(81%)	53~72(1)	9	0	0	0	9	7	1	0	1	8	0	0	1	0	2	3	4	0	0	
32組	19	6(34%)	45~62(2)	3	0	0	0	2	1	0	0	2	4	0	0	3	3	1	0	0	2	0	

共同教化についての考察(中) 共同教化に対する意識

資料B 回答数	性別	年齢	Q1共通化は必要か		Q2共通の範囲について						Q3施策を学びたいか						Q4満足Qの存在の有無						Q5満足Qに期待する組織・役職					
			必要	不要	未記入	大谷	門庭	植原	以外	その他	未記入	U1	U2	U3	その他	未記入	必要	不要	その他	未記入	医師・講師	教員	部長	主婦	その他			
424	／	24～95	223	153	36	13	290	245	147	41	30	22	248	133	5	38	270	122	6	27	177	86	57	106	38			
			52.5%	36.0%	8.4%	3.0%	69.0%	57.7%	34.6%	9.6%	7.0%	5.1%	58.4%	31.3%	1.1%	8.9%	63.6%	28.7%	1.4%	6.3%	41.7%	20.2%	13.4%	25.0%	8.9%			
1	0.2%	20-24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
0	0%	25-29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
11	2.5%	30-34	9	3	0	0	5	5	7	4	3	0	10	1	0	0	10	1	0	0	7	3	1	5	2			
			72.7%	27.2%	0	0	45.4%	45.4%	63.6%	9.0%	27.2%	0	90.9%	9.0%	0	0	90.9%	9.0%	0	0	63.6%	27.2%	9.0%	45.4%	18.1%			
17	4.0%	35-39	12	5	0	0	15	13	13	5	2	0	13	4	0	0	13	4	0	0	8	3	3	7	1			
			70.5%	29.4%	0	0	88.2%	76.4%	76.4%	29.4%	11.7%	0	76.4%	23.5%	0	0	76.4%	23.5%	0	0	47.0%	17.6%	17.6%	41.1%	5.8%			
27	6.3%	40-44	15	12	1	0	19	20	15	4	4	0	21	6	0	0	17	10	0	0	10	2	2	3	2			
			59.5%	44.4%	3.7%	0	70.5%	74.0%	59.5%	14.8%	14.8%	0	77.7%	22.2%	0	0	62.9%	37.0%	0	0	37.0%	7.4%	7.4%	11.1%	7.4%			
51	12.0%	45-49	24	24	3	0	42	31	14	6	1	0	29	20	1	1	31	19	1	0	26	10	5	9	4			
			47.0%	47.0%	5.8%	0	82.3%	80.7%	27.4%	11.7%	1.9%	0	56.8%	39.2%	1.9%	0	50.9%	37.2%	1.9%	0	50.9%	19.6%	9.8%	17.6%	7.8%			
56	13.2%	50-54	31	16	6	3	32	31	22	9	4	4	32	18	1	5	35	18	0	4	20	12	9	15	8			
			59.3%	28.9%	10.7%	5.3%	57.1%	53.5%	39.2%	16.0%	7.1%	7.1%	57.1%	32.1%	1.7%	9.8%	62.9%	32.1%	0	7.1%	39.3%	27.4%	19.6%	28.7%	14.2%			
72	16.9%	55-59	41	20	8	3	44	42	26	3	6	4	43	21	0	8	44	21	0	9	29	17	9	17	9			
			56.9%	27.7%	11.1%	4.1%	61.1%	58.3%	36.1%	4.1%	8.3%	5.5%	59.7%	29.1%	0	11.1%	61.1%	29.1%	1.3%	8.3%	40.2%	23.6%	12.5%	23.6%	12.5%			
57	13.4%	60-64	33	20	3	1	43	33	18	7	2	1	35	18	0	4	41	15	1	0	24	10	9	20	5			
			57.8%	35.0%	5.2%	1.7%	75.4%	57.8%	31.5%	12.2%	3.5%	1.7%	61.4%	31.5%	0	7.0%	71.9%	26.5%	1.7%	0	42.1%	17.5%	15.7%	35.0%	6.7%			
57	13.4%	65-69	31	18	7	1	36	33	11	0	4	3	35	17	1	4	39	11	1	6	35	18	12	18	2			
			54.3%	31.5%	12.2%	1.7%	63.1%	57.8%	19.2%	0	7.0%	6.1%	61.4%	29.8%	1.7%	7.0%	69.4%	19.2%	1.7%	10.5%	43.8%	31.5%	21.0%	28.0%	3.5%			
33	7.7%	70-74	17	12	2	2	21	19	8	3	3	3	11	13	1	8	17	10	1	5	12	7	4	6	3			
			51.5%	38.3%	6.0%	6.0%	63.6%	57.5%	24.2%	9.0%	9.0%	33.3%	39.3%	30.0%	24.2%	51.5%	30.3%	3.0%	15.1%	36.3%	21.5%	12.1%	18.1%	9.0%				
9	2.1%	75-79	3	4	2	0	6	4	2	0	0	1	2	3	0	4	4	2	0	3	1	1	2	2	0			
			33.3%	44.4%	22.2%	0	60.0%	44.4%	22.2%	0	0	11.1%	22.2%	33.3%	0	44.4%	44.4%	22.2%	0	33.3%	11.1%	11.1%	22.2%	22.2%	0			
3	0.7%	80-84	0	2	1	0	3	1	0	0	0	0	2	1	0	0	2	1	0	0	1	0	1	0	0			
			0	66.6%	33.3%	0	100%	33.3%	0	0	0	0	66.6%	33.3%	0	0	66.6%	33.3%	0	0	33.3%	0	33.3%	33.3%	0			
1	0.2%	85-89	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0			
			0	100%	0	0	100%	100%	0	0	0	0	100%	0	0	0	100%	0	0	0	100%	0	0	0	0			
3	0.7%	90以上	0	2	1	0	1	1	2	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	1	1	0	1	0			
			0	66.6%	33.3%	0	33.3%	66.6%	0	0	0	0	33.3%	66.6%	0	0	33.3%	66.6%	0	0	33.3%	33.3%	0	33.3%	0			
26	6.1%	未記入	8	13	3	3	13	10	9	3	3	1	6	13	9	1	3	15	8	1	2	12	2	0	3			
			30.7%	50.0%	7.6%	11.5%	50.0%	38.4%	34.6%	11.5%	3.8%	23.0%	50.0%	34.6%	3.8%	11.5%	57.6%	30.7%	3.8%	7.6%	46.1%	7.6%	11.5%	7.6%				

調査数	割合	年齢	Q6共同教化活動を行っている				Q8相手共同教化に相応しい組織か				Q3共同教化に最も適した寺院数は						
			いる	いない	その他	未記入	思う	思わない	その他	未記入	5以下	6～10	11～15	16～20	21以上	その他	未記入
424	／	24～95	194	204	1	25	249	119	15	41	105	102	55	48	42	12	68
			45.9%	48.1%	0.2%	5.8%	58.7%	28.0%	3.5%	9.6%	24.7%	24.0%	12.9%	11.3%	9.9%	2.8%	16.0%
1	0.2%	20-24	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
			0	100%	0	0	100%	0	0	0	0	0	0	0	100%	0	0
0	0%	25-29	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
11	2.5%	30-34	6	4	1	0	3	5	0	3	4	4	3	0	1	0	0
			54.5%	36.3%	9.0%	0	21.2%	45.4%	0	21.2%	36.3%	36.3%	21.2%	0	9.0%	0	0
17	4.0%	35-39	10	7	0	0	9	8	0	0	5	5	2	2	0	2	0
			58.8%	41.1%	0	0	52.8%	47.0%	0	0	29.4%	29.4%	11.7%	11.7%	11.7%	0	11.7%
27	6.3%	40-44	15	10	0	0	18	6	0	3	10	6	5	2	2	2	2
			55.5%	37.0%	0	0	74%	66.6%	22.2%	11.1%	37.0%	22.2%	18.5%	7.4%	7.4%	7.4%	7.4%
51	12.0%	45-49	24	23	0	4	37	9	1	4	14	10	12	4	6	0	8
			47.0%	45.0%	0	7.8%	72.5%	17.6%	1.9%	7.8%	27.4%	19.6%	23.5%	7.8%	11.7%	0	15.6%
56	13.2%	50-54	29	24	0	3	27	18	6	5	17	10	5	8	8	5	3
			51.7%	42.8%	0	5.3%	49.2%	32.1%	10.7%	9.5%	30.3%	17.8%	9.5%	14.2%	14.2%	9.5%	9.5%
72	16.9%	55-59	37	31	0	4	42	18	3	9	17	16	6	7	9	3	14
			51.3%	43.0%	0	5.5%	58.3%	25.0%	4.1%	12.5%	23.6%	22.2%	8.3%	9.7%	12.5%	4.1%	19.4%
57	13.4%	60-64	27	27	0	3	37	16	2	2	12	12	8	11	5	2	7
			47.3%	47.3%	0	5.2%	64.9%	22.0%	3.5%	22.8%	22.8%	14.0%	19.2%	8.7%	3.5%	12.2%	12.2%
57	13.4%	65-69	26	26	0	5	28	22	0	7	11	18	7	3	4	0	15
			45.6%	45.6%	0	8.7%	49.1%	38.5%	0	12.2	19.2%	31.5%	12.2%	5.2%	7.0%	0	20.3%
33	7.7%	70-74	7	25	0	1	20	9	2	2	11	9	4	1	0	1	7
			21.2%	75.7%	0	3.0%	60.6%	27.2%	6.0%	33.3%	27.2%	12.1%	12.1%	3.0%	0	3.0%	21.2%
9	2.1%	75-79	1	7	0	1	6	0	0	3	2	4	0	0	1	0	2
			11.1%	77.7%	0	11.1%	66.6%	0	0	33.3%	22.2%	44.4%	0	0	11.1%	0	22.2%
3	0.7%	80-84	1	2	0	0	3	0	0	0	2	0	1	0	0	0	0
			33.3	66.6%	0	0	100%	0	0	0	66.6%	0	33.3%	0	0	0	0
1	0.2%	85-89	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
			0	100%	0	0	100%	0	0	0	100%	0	0	0	0	0	0
3	0.7%	90以上	1	2	0	0	3	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1
			33.3	66.6%	0	0	100%	0	0	0	33.3%	0	0	0	33.3%	0	33.3%
26	6.1%	未記入	10	14	0	2	15	7	1	3	2	4	3	8	3	0	6
			38.4%	53.8%	0	7.6%	57.6%	26.9%	3.8%	11.5%	7.6%	15.3%	11.5%	30.7%	11.5%	0	23.0%

共同教化についての考察(中) 共同教化に対する意識